

「落語入門」の実践報告

—小噺創作活動を通して得た日本語能力とは—

宗 林 由 佳

要 旨

本稿は、名古屋大学国際言語センターで2022年6月に日本語・日本文化研修コースの学生を対象に開講された落語特別講義（全6コマ）の実践報告である。伝統芸能の一つである落語を話芸として捉え、小噺創作活動を通して得られた学習者の学びとその成果を報告するものである。

キーワード

落語、小噺創作活動、実践、学び、気づき

1. はじめに

大学で言語学や日本語学を専門とする学生で、中・上級レベル以上の日本語能力を有している学生は数多くいる。また日本の伝統芸能に親しみ、その一つである落語を見たり聞いたりしたことのある学生も数多くいるであろう。本稿では、伝統芸能である落語を理解するだけでなく、落語を一つの教材として捉え、授業では落語の所作をはじめとする表現技術を学び、小噺のおちを理解し、自ら小噺を作り発表するという一連の創作活動（全4コマ）の詳細を述べる。また創作活動の成果を発表する場として、落語会の前座として学生の創作小噺を発表する。落語会は前座を含めて、全2コマである。

本授業は、落語の小噺を学び、学習者自ら創作活動を実践することにより、伝統芸能（「話芸」としての落語）の理解と学習者の日本語表現能力を促進させることを目標とする。

小噺創作活動には、以下のようなねらいがある。

1. 落語を理解し小噺の実践に取り組むことにより「オチ」についての理解を深め、日本の話芸についての理解を深める。
2. 小噺創作活動を通して日本語の口頭表現能力を向上させる。
3. 小噺創作活動を通して落語の所作・身ぶり手ぶりなど文化間のしぐさの違いを考える。
4. 落語家から小噺の指導を受けることを通して、日本の伝統芸能をより身近に感じる機会を得る。
5. 落語家を招き、落語を鑑賞する。日本の伝統的な話芸を聞くことにより、日本語の豊かさを感じ取る。

2. 先行研究

畑佐（2010）では、2006年夏、米国ミドルベリー夏期日本語学校で落語家を招き落語会を始めたことがきっかけとなり、2007年からは学生達に小噺を覚えさせるようになり、師匠に稽古をつけてもらい、前座として高座に上がるようになったという報告がある。畑佐はこれがきっかけとなり、「落語」という古典芸能を学生に見せることから、学生に短い小噺を覚えさせ、高座に上がるまでになったことから、「観る文化」から「(体験)する文化」に変わったと述べている。

酒井（2012）では、留学生のための落語会を開催し、事後調査として留学生にアンケートを実施した結果、留学生の日本語能力により理解の差はみられるものの、落語の噺には、国や民族を超えて理解し共感できるものが多いことを指摘し、噺家が登場人物の職業や性格等を描写したり豊かな感情を表現したりすることから、落語を生きた教材として捉えている。また落語特有のおちを理解し落語を楽しむためには、小噺そのものを理解する必要があるとし、日本語学習支援 CALL プログラムの開発を手掛けている。（酒井：2018）

以上の先行研究から伝統的な話芸としての「落語」から、日本語学習者自らが小噺のオチを理解し、小噺を創作・実践することで、自らの日本語

を磨く学習アプローチとなっていることを報告するものである。

本授業では、落語にあまり親しみのなかった学習者が自ら小噺の創作活動を実践した結果、落語の面白さを発見できたと考える。

3. 授業の概要

授業のシラバスは以下のものである。

第1回（2022年6月2日）

「伝統的な話芸の一つである「落語」の特徴を知る」

小噺を聞いて「オチ」を理解する。

第2回（2022年6月3日）

落語の所作を理解する。

登場人物の特徴を考え、所作を実践する。

第3回（2022年6月10日）

小噺創作活動① 「小噺のあらすじ」を考える。

小噺をいくつか作成する。（課題）

第4回（2022年6月17日）

小噺創作活動② 小噺実践練習

第5回（2022年6月24日）

小噺発表会

第6回（2022年6月24日）

落語会（落語家 登龍亭獅鉄）

4. 授業の実践方法と内容

落語の小噺創作活動に入る前に、「伝統的な話芸を知る」「落語の特徴」を考える時間を1コマ作った。創作活動の「導入」と位置づけ、以下のような内容で実施した。

4. 1 小噺創作活動の導入

日本の伝統的な話芸として「講談」と「浪曲」を取り上げ、紹介した。「講談」では、神田伯山の「天保水滸伝～相撲の啖呵」を取り上げ、釈台と張り扇

のパフォーマンスからその特徴を考えた。また玉川奈々福の「浪曲」を取り上げ、三味線と台詞と節回しを鑑賞させた。伝統的話芸が「伝統」という言葉で古くさいものとラベルがつけられがちだが、実は演芸場に行かずとも生活の身近なところに講談師や浪曲師が映画やドラマ等の語り手として登場している。テンポよく、独特の節回しで物語を進め、その語り調子は心地よいリズムで流れていく。授業ではその魅力をいくつかの映像を通して紹介した。

授業後半は、春風亭昇太の創作落語「ストレスの海」を鑑賞用の素材とした。まずは日常生活での夫婦のやり取りが現代語で続く。ご主人の抱えるストレスを少しでも和らげようと気遣う奥さんとのやりとりが自然だ。ここでは、一人の落語家が二役を使い分け、声の高さや調子、リズムを持って演じ分けている。

この「導入」では、古典落語に見られる話の設定や使われる語彙の難しさもない、ドラマを見ているような感覚で「落語」を聞くことが目的となる。ただ異なることは一人の落語家が複数の役を演じていることだ。

4. 2 落語の所作と演じ分け

次に具体的に「演じ分け」のために必要なことは何かを考える実践練習を行なった。ミドルベリー小噺集を活用し、学生二人で演じてもらうこととした。

素材①

交通事故

ある日、車の事故があって、家族全員が死んでしまいました。でもこの家族が飼っていたサルが生きていました。このサルはただのサルではありません。このサルは人間の言葉がわかります。そこで警察がこのサルに事故について質問しました。

警官「私が言っている言葉がわかるかい？」

サル「ウキキキキキキキ（うなづく）」

警官「じゃ、まず、事故が起こる前に、お父さんは何をしていたんだい？」

サル「ウキ、ウキ、ウキキキキ。（携帯電話で話しているジェスチャー）」

警官「そうか。それが事故の原因かもしれないな…
じゃ、お母さんは何をしていたんだい？」

サル「ウキ、ウキ。（居眠りのジェスチャー）」

警官「そうか。それも事故の原因かもしれないな…
じゃ、子どもたちは何をしていたんだい？」

サル「ウキキキキキキ（けんかしているジェスチャー）」

警官「そうか。それも事故の原因かもしれないな…
ところで、おまえは何をしていたんだい。」

サル「ウキキキキキキキ（車を運転しているジェスチャー）」

素材②

酔っ払う

A：お父さん、酔っ払うってどういうことなの。

B：ううん、説明しづらいけど、例えばそこにグラスが2つあるだろう。それが4つに見えたら酔っ払っているということだ。

A：でも、お父さん、グラスは1つしかないよ。

素材①では、非言語行動による伝達を主とし、素材②では、親子の会話、子どもと父親をどう演じ分けるかを課題としている。年齢、職業、性差等の違いを言語表現によって使い分ける役割語があるが、ここでは表現の違いではなく、声質、声の出し方等を工夫して自分で父親、子どものイメージを作っていく作業だ。そして役者として演じる、別の人格となって演じることで、恥ずかしさがなくなっている。学生の中には声優のように声質を変えて、使い分ける学生も出てきている。椅子に座って体を動かす、身

振り手振りを実演するところから、落語の高座へと上がる。

授業後半は、高座の上／下から上下をきる、小道具の使い方、身振りと表情等を映像を見ながら確認していった。ここから落語家のように一人で演じ分ける練習へと進む。

4. 3 落語のオチ

落語のオチとはどんなものなのか。学生に小噺集を見せ、オチがあるのか、どんなオチなのかを考える。オチとは、落語で笑いを誘う部分である。小噺作成は会話作成にも似ているといえるが、大きな違いはその会話に笑いを誘うところを入れ込むことだ。オチの入れ方によっていくつかに分類される。

4. 3. 1 単発で笑いを誘う

学生1

子ども：モノレール、遅れてるって。

父親：え、遅れてるのか。電車で行くか。

子ども：あ、見えた。

父親：おお、来たか。

子ども：うん、お父さん、これでもう～乗れ～るね。

学生2

客：私のショートケーキは、まだ。

店員：申し訳ありません。

客：ねえ、ショートケーキは？

店員：申し訳ありません。

客：ショートケーキなのに、なんでこんなに長いわけ。

学生3

関西の大学で勉強している友だちが久しぶりに名古屋に帰ってきま

した。

友人A：おお、ひさしぶり。

友人B：おお、ひさしぶり。ひさしぶりにご飯、食べにいかん。

友人A：ええな。何食べる。

友人B：じゃ、最近はやりの冷やしラーメン食べに行こ。

友人A：え、冷やし。ラーメンじゃないな。蕎麦だな。

友人B：スープの中に氷、そこにラーメンが入っとる。

友人A：ううん、うまいか。

友人B：まあ、一度食べにいこ。

店員：らっしゃい。

友人B：おやっさん。冷やしラーメン2つ。

店員：あいよ。

友人B：おお、来た来た。食べてみ。

友人A：うん。うまいな。

友人B：だろ、これがうまいんだって。

友人A：うん。

友人B：あれ、うまいって言ってるくせに、なんかテンション低いな。

友人A：え。

友人B：もっとテンション上げろや。

友人A：いやいや、冷製だけに。

上の1. 2. 3. の例は笑いを誘い込む部分が、一文、一語に集中しているために、ここを聴衆にきっちり理解してもらふ技量が必要となる。話すタイミング、声の抑揚、大きさ等が決め手になると言えるだろう。練習では、オチに入る前に本人がクスッと笑ってしまう場面が見られた。

4. 3. 2 ストーリーによる伏線で笑いを誘う

オチがストーリー展開の先に組み込まれていて、聴衆がストーリーに引

き込まれて行くところで、最後に話のオチが来るものを指す。話が長いだけに、音声表現能力、演技力が要求される。

学生4

夫婦の会話です。

夫：よっしゃー。

妻：なになに。

夫：いや、床屋のクーポンが当たったよ。

妻：え、なに。

夫：このクーポンを持っていけば、ただで髪を染めてもらえるってさ。

妻：え、だれが。

夫：やったー！

妻：ちょっと、あなた、お坊さんでしょ。

学生5

妻：ねえ。

夫：なに。

妻：私たち別れよ。

夫：え、ちょっと待って。え、なんで。俺、なんかやった。教えてよ、直すからさ。

妻：私はね、さびしいの。

いつもあなたはさ、いつも一人で運転してどっか行くでしょ。

いつも夜中しか帰ってきてくれないじゃない。

夫：あ、それは無理だ。

妻：え、なんで、わかった。やっぱり私のこと嫌いなんでしょ。

夫：いえ、俺、タクシードライバーだから。

学生6

店員：どうぞ、ご覧ください。

今日限定の特別価格です～。

客：その扇風機、いくらですか。

店員：こちらですか。お客様お目が高い！今日限定でなんと18,000円でございます。

客：え、高い。これって、本当に特別価格ですか。

店員：はい。そうなんですよ。

客：確か昨日のほうがずっと安かった気がしますけど。

店員：そうなんですよ。お客様

客：え、どういうことですか。

店員：それはですね。昨日のほうが安くて、今日は高い、特別価格なんです。

5. 実践の成果

以上、見てきたように学生の創作小噺は、「オチ」のある素晴らしい小噺が完成した。練習を重ね、発表前のリハーサルではそれぞれの演技を互いにコメントをする時間をとることができた。ここでは、聴衆の笑いを期待するところととれるかどうか、オチのタイミングがいいか、ストーリーが複雑になっていないか等、様々な観点からコメントを出し合い、よりいいものを全員が目指した。

発表当日、緊張が見られたものの、練習の成果もあって一人一人の演技力は光っていた。



小噺発表風景



小噺発表風景

6. まとめと課題

小噺創作活動は、古典芸能の落語を理解することと、学習者の日本語の表現能力を高めることを目的として進めてきたが、創作活動を通して協働学習が進み、自らの気づきをもとに創作活動の質を高めることができた。今後の課題として、落語では基本的な知識でなる座布団の座り方、お辞儀の仕方等の行儀作法、手の所作、上下の切り方を理解しさらに練習を積むことが求められるだろう。

参考文献

畑佐一味「英語の小噺を取り入れ、笑いながら、日本語力を伸ばす」『月刊日本語 10』

アルク 2010.10. p.70-p.71

酒井たか子（2012）「中上級日本語学習者が落語を通して学べるもの」『日本語教育方法研究会』

酒井たか子、山田亨（2016）「〈報告〉落語・小噺を利用した日本語学習支援 CALL プログラムの開発と試行」筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集2016.3

森真由美（2018）「生の素材（落語を含む）を利用した実践活動の変遷と動向—学会誌『日本語教育』の調査結果に基づいて—」『金城学院大学論集人文科学編 第14巻第2号』2018

森真由美（2018）「落語を利用した日本語教育の研究」学位論文

みんなの小噺プロジェクト

<https://one-taste.org/kobanashi/>

文化デジタルライブラリー

<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc20/geino/kodan/index.html>

春風亭昇太による新作落語 ストレスの海

【落語チャンネル】 ネット寄席

<http://rakugo-channel.tsuvasa.com/sutoresunoumi-shota>

畑佐一味「初級者からできる日本語学習者による小噺プロジェクト」

<http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/rakugo/>